

長野式で人生が変わった人。父が健在な頃、東北の1人の人物と出会いました。彼は鍼灸師の免許を持っていましたが、鍼灸で治せるという自信はなく、判然としない状態で鍼灸に携わっていました。あるきっかけで長野式を知り、大分まで訪ねてきました。

今まで、鍼灸というもの、脈診というものに、あまり接したことがなく、半信半疑だった彼にとって、当院で見ることにすべてが驚きの連続だったようです。最近もらった手紙に次のようなことが書かれています。

『鍼灸は効かない』と思い始めていた私にとって、長野潔先生との出会いは衝撃でした。脈診をして、鍼をすると数分もたたないうちに患者さんが『楽になりました』と一言。あまりのあっけなさに不謹慎と思いつつ笑いが出ました。

これで私はようやく救われる！治らない治療をしてうしろめたい気持ちで患者さんに負い目を感じることもなくなる」

これはその当時の彼のありのままの心境です。

彼、長野谷氏はそれから毎年のように研修にみえ、今は秋田県能代市で開業され脈診をしながら臨床に勤んでいます。先日治験例を寄せてくれたので公開します。

微熱、寒気、胸痛、頻尿、胃痛（長野谷務氏症例1）

秋○夕○ 六八歳

主訴 微熱、寒気、胸痛、頻尿（夜間2時間おき）、胃痛

現症 あまりに症状があり、何が主訴かわからない。寒気は10ヶ月前、風邪をひいてから止まらない。10年前から色々な症状で病院を変えてみるが良くなる。

所見 「浮・緊・数」、火穴全部 (+)、アキレス腱もひどく痛がる。あきらかに扁桃の二次感染症だろう。腹部全て (+)、鼠径部 (+)、背骨全て (+)、臆中 (+)、期門 (+)。

処置 「扁桃処置」「瘀血処置」「肝実処置」（これ以外に自律神経調整処置を加えるべきだった）。
臆中に郗門、少海。アキレス腱が (-) になったところで終わる。

経過 五回目（十三日目）伏せると胸にボタンがあるように痛かったのがない。腹冷え、頻尿は夜2回だけ、寒気、微熱も気にならなくなった。胃の調子まだ良くない。T11を押すと胃にまで放散痛があるので、「糖尿処置」を加えてみる。痛み緩解する。

七回目（二十日目）尿失禁するようになってたいへん来院。恥ずかしいわりに声大きい。胃も調子悪い、薬（入眠剤）の飲みすぎに注意。同前処置で胃も緩解。

八回目（二三日目）何事もなかったような顔をして、胃の調子が悪いのだけを何度も訴える。他の症状はすべて消失しても胃が治らないのは「へボ」だと言われる。

考察 初発が風邪症状からなので、「扁桃の弱体」がすべての原因と考える。食事もうまくとれていないし、市販の栄養剤と薬を大量に飲むからかえって体力がなくなり、風邪をひき、寒気にまで発展したものと考える。薬の信仰から逃げられない患者は多い。